

1) 「サウンド・マルチプル」について

□マルチプル作品とは？

マルチプル作品とは、作家の一点物の作品と出版社による商品の中間に位置付けられるもの。作家が直接関与してある程度の方が手作りで作られたオブジェ的な作品。目的を同じくする作家同士の共同体が手がけることも多い（手作り本など）。

その起源はジョージ・マチューナスが興したフルクサスで、各作家が手作りした小さな作品を、マチューナスのデザインによるロゴをつけて販売した。またサイズを指定して木箱にセットし、フルックスキットという形でも制作された。

マチューナスが亡くなった後に、作家たちから寄せられたままバラバラに残っていたさまざまなものを、写真家ピーター・ムーアの奥さんのバーバラ・ムーアが整理して「リ・フルックス・エディション」として販売した。
同様にシャーロット・ムアマンが亡くなった後にも、彼女やパイクの資料を整理した箱入りエディションが作られた。
彼女は1990年代半ばに、ロワー・マンハッタンにBound and Unboundというアート系のショップを開店した。

これらの例のように、誰かディレクターが存在していること、そのディレクターの意図やセンスでフォーマットが決められることがポイントだといえる。

美術館が制作したものも多く、その場合は個人がオーガナイズしたものに比べてエディション数が多い。2014年に閉館した清里現代美術館のコレクションにも多く含まれている。

有名なものはメンヒェン・グラートバツハ市立美術館の33タイトルにおよぶシリーズで、約20x16センチ規格の紙箱で作られている。作家がその思想を箱の中に表現したという意味で、コンセプチュアル・アートの一形態といえる。

・ゲルハルト・リヒター

（コレクションを東京から美術館に引っ越し際、行方不明だったこの作品が、たんすの後ろに落ちていたという話を直接聞いた。）

・ハンネ・ダルボーフェン

・カール・アンドレ

・パレルモ

・ヨゼフ・ボイス 他

□モーツァルト・ミックスに関連して、Edition Block（エディション・ブロック）の説明

René Block（ルネ・ブロック、1942 - ）は、自身のギャラリーGalerie Blockを開業した1966年から、同時にEdition Blockを始め、Wolf Vostell、Joseph Beuysのマルチプル作品を皮切りに、晩年まで多数の作品を制作した。モーツァルト・ミックスはその一環であるが、その長い歴史の中で初のサウンド・マルチプルであった。

100枚のレコードを12台のプレーヤーでランダムに再生する「33 1/3」、88本のオープンリールテープを12台のプレーヤーで再生する「モーツァルト・ミックス」といった聴衆参加のインスタレーション作品をポータブル化したものともいえる。

エディションとして制作された、世界初のインスタレーション作品であり、ケージのサウンド・マルチプルとしては最初で最後のものとなった。

流通目的のLPやCDの制作も行い、日本の西武美術館に付属していたショップ、アール・ヴィヴァンなどで販売されたものもある。

gelbe MUSIK（ゲルベ・ミュージック）

ベルリンのレコードショップとして1981年に開店、2014年に閉店した。実質的に運営していたのはRené Blockの奥さんのUrsula Block（ウルズラ・ブロック）で、何度か来日もしている。ご主人のRenéはキュレーターとして展覧会の企画などを手がけ、またEdition Blockの活動を通してアーティストたちと交流が深く、このレコード店では美術家が作った音作品やマルチプルが多数展示・販売されていた。

Broken Music

1987年にRené Blockによって、現代美術の視点による音作品のコレクションを一堂に集めた、Broken Musicという画期的な展覧会が行われ、立派な展覧会カタログが作られた。これらのディスクはギャラリーや美術系出版社が作ることが多く、一般には流通しなかったため、このカタログによって幻のレコードが実験音楽のコレクターに知られることとなった。

すでにカタログ自体が美術品として扱われ、最近復刻されるまで高額で売買されていた。

□サウンドマルチプルとは？

字のごとくならば音が含まれたマルチプル。しかしレコードやテープといった録音物がついているという意味ではない。それらは内容が固定されたものであり、鑑賞者が介入することはできない。対してサウンドマルチプルは、鑑賞者が操作することで初めて音が成立し、音は常に変化する。

音自体を積極的に意識する作家はそこそこいますが、ブツとして残るスタイルの作品事例は多くない。

まず挙げられるのがフルクサスの作家Joe Jones（ジョー・ジョーンズ、1923-1985）。一貫してガラクタのような音響オブジェを提示し、晩年はソーラー電源で「演奏」するオブジェ作品を制作した（ソーラー・テントなど）。

かつて存在したギャラリーHundertmark（フンデルトマルク）が、そういう装置そのものをマルチプル作品として販売した。バイオリンやギターなどの弦を、モーターに付けた針金が激しくはじき、野蛮な騒音を撒き散らす形態のものがある（ミュージック・ボックスなど）。都内のギャラリー360°の初期の頃にその一つ（たぶん）を販売していた。

他の例として、村井啓哲の“LUX/MW”（ルックス/ミドル・ウェーブ）という最近の作品は、鑑賞者自身が指示書きにしたがって装置を組み立て、音を発生させて楽しむ（限定10）。

小杉武久の1998年の作品“Interspersion”（インターパージョン）は、小さな電子音を発生させる数個のスピーカーから成るオブジェで、そのままインスタレーションにも使える作品。（限定30）。

微妙な境界線上にあるのがクリスチャン・マークレイ“Footsteps”。

大手レコード会社が制作・販売（1000部？）したのでマルチプルとはいえないが、ギャラリーの床に敷き詰められたLPレコードは鑑賞者に踏みつけられ、足跡が付いている。つまり一つとして同じものがない。作家自身の手作業ではないが、作家が仕掛け人としてマルチプルの仕立てた、ということか。

壁際のレコードは足跡がつかないので、それが入っていたら大当たりだとか。

2) モーツァルト・ミックスの概要 それを売った話

Edition Block制作。モーツァルトの死から200年の1991年に、その35年の生涯にあわせて35部限定で作られた。

- a. シルクスクリーン印刷のメソスティックスのサイン入りアートワーク（70 x 70cm）
 - b. 様々な長さのエンドレスカセット25本
 - c. カセットプレーヤー5台
- これらを木箱にセットした。

なお、これに付属するシルクスクリーン印刷のアートワークは、独立した作品としても作られた。色違いで若干サイズが小さい。サインなしでナンバリングだけされていた模様。

オメガポイント開店当初からgelbe MUSIKにコンタクトしていて、その販売品リストを送ってもらっていた。リストは2、3年に1度しか作られないが、その中にモーツァルト・ミックスが写真入りで載っていた（版元ですから当然）。美術品といえる値段なので、リリースから数年経っていてもまだ在庫があった。

さすがにすぐ注文というわけにはいかず、まず「この人なら」というターゲットに向けて案内を送り、反応を見てからオーダーした。その結果が川村氏である。

輸入に際しても重量物で送料も高いうえに、美術品扱いなので保険付き、関税も結構かかった。さすがにギャラリーで、頑丈な木枠で保護されていたが、引き取られるまで、激せまな店内のかなりのスペースを占拠していた。

実は川村氏とは別にもう一人買った人がいた。いままってるのか不明。単なる金持ちのコレクターでケージ愛はないので、ブックオフに投げたかも？

3) ケージの聴衆参加型インスタレーション作品の紹介

モーツァルト・ミックスは、聴衆がカセットを操作して参加することもできる作品といえる。そのようなケージ作品を紹介。33 1/3とローツァルト・ミックス。YouTube映像。

どちらも「ケージ生誕100年記念カウントダウン・イベント」の映像。いろいろ探したが、これが一番状況がわかる。33 1/3は青山学院大学にて。

ローツァルト・ミックスはオープンリール・テープレコーダーを使うので、観客参加というわけにはいかず、パフォーマーとしてニシジマアツシや竹村延和などが演奏した。

ローツァルト・ミックスは、2013年南米チリでも行われた。